



## 近世日本天文史料

大崎正次編

1994年2月発行

原書房, 620+XVII頁, 18540円

専門書

お薦め度

☆☆☆☆☆

1935年に出版された神田茂先生の「日本天文史料」に収められている史料は、西暦1600年までのものだけであったが、今回の本書には、1601年から1867年までの、江戸時代の天文史料が収録されていて、先の史料集の続編となっている。

編者の大崎正次(しょうじ)氏は、今から60年まえに広瀬秀雄氏と共に神田先生の史料収集を手伝はれた人で、今回、病身の上にご高齢にも拘らず、本書の出版を成し遂げられたご努力には敬服のほかはない。

実は、先の史料の収集が行なわれた時、同時に1601年以後の史料も沢山集められていた。しかし神田先生のお考えによって、1600年までのものしか出版されず、それ以後のものは、永い間、神田先生の手元で眠っていたのである。そして、一時行方不明になっていたのを、偶然、大崎氏が古本屋で発見された事が本書の出版の直接のきっかけとなったのである。そして、新たな史料の収集には、大谷光男氏(二松学舎大学教授・日本史)の協力と援助があり、その結果、本書が完成した事は心から喜びにたえない。

今回の史料集の特色は、一般の歴史家にも役に立つように、それぞれの天文現象に対する記述者の考え方や、その前後の出来事などを省略せずに出来るだけ収録しようとした点にある。さらに、検証可能な天文現象には、その事象を確かめる事の出来る注記が付けられている。また、口絵や、巻末には付図があり、天文月報に一度掲載されたことがある琉球の天文史料も収録されていて、読んだり、眺めたりも出来る史料集と言えよう。

本書の内容は、先の「天文史料」とほぼ同じで

日食、月食、月星接近、星食、惑星現象、星屋見流星、隕石、彗星客星、老人星、怪星、異星と雑象の順に類別され、雑象は、さらに日暈、月暈、旗雲、赤雲、白気、赤気 に分類されている。

怪星、異星と雑象の項は、先の「天文史料」とやや異なるところで、これらは天象ではなく、むしろ気象現象と思われる。しかし当時の人は、これも「天文」の一種と見ていたので、これらの史料は昔の天文に関する思想や考え方などを知る良い手がかりになるだろう。日食や月食については渡辺敏夫氏の「日食月食宝典」によって、京都や江戸の食甚時刻や食分が注記されている。ところが、月食については、ところどころに「月食なし」とあるが、実はその大部分は半影月食である。このことは、先の「天文史料」でも同様で、参考用に用いられたオッポルトツエルや、渡辺氏の宝典では半影食は除外されていたのである。もっとも、当時の暦では、月の要素の不備の為、本影食として予報されたものもあろうし、中には実際に半影食を見た記録があるかも知れない。

江戸時代には、幕府の天文方や、大阪の間家の観測記録などがあり、その他にも地方史料には、膨大な天文記録が残されている。本書には、そのほんの一部しか収録されていない。今後、本書の出版を契機として、それらの調査や編纂が進められるものと期待される。何はともあれ、本書によって、明治以前の日本の天文史料が一通り全て収集されたことになったのである。なお、先の「日本天文史料」と、「日本天文史料総攬」は、1978年に本書と同じ原書房から復刻出版されている。

長谷川一郎(大手前女子短期大)